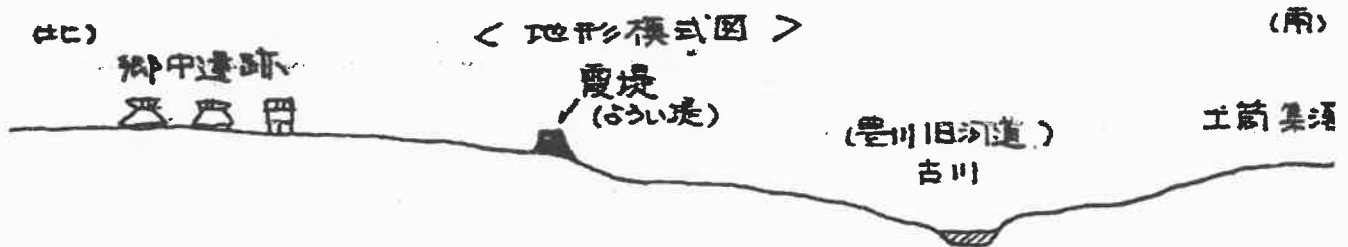


郷中遺跡発掘調査の概要 中間報告 2/21

遺跡見学会資料

I、郷中遺跡の環境

郷中遺跡は、豊川の形成した自然堤防上に立地する遺跡であり、標高約7mをはかります。現在豊川は、遺跡から約1km南に離れた場所に流れをみますが、かつては遺跡のすぐ南側をながれていたこともあり、現在そこには古川（ふるかわ）が流れています。遺跡からは、中世の土錘（どい）土製のおもり）も出土しており、川の幸にも恵まれた、豊かな土地と言えましょう。弥生時代になり、米作り（こむくり）を知った人々は、ここに一つの大きな村を築きあげたのです。



II. 郷中遺跡の概要

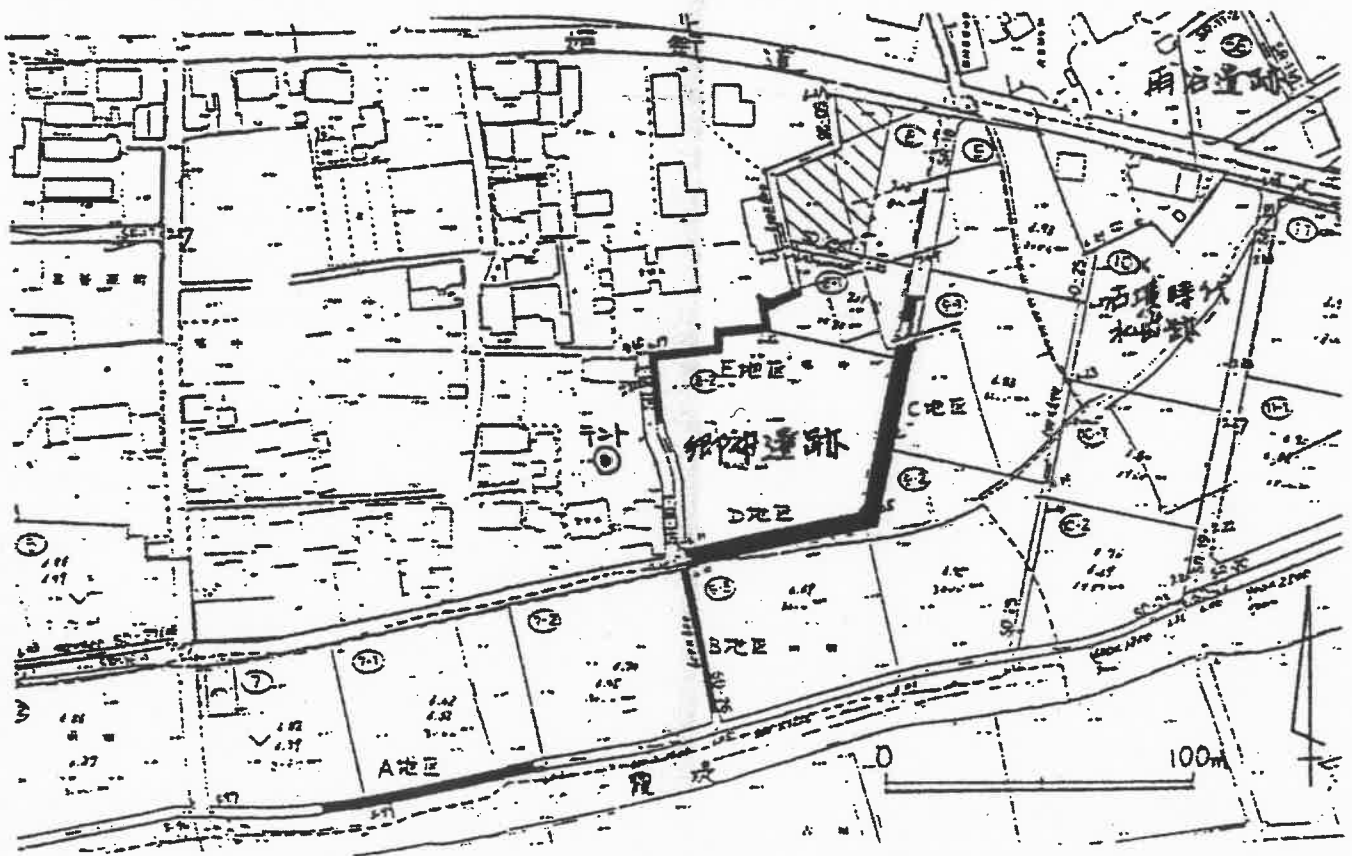
郷中遺跡は、縄文時代晩期・弥生時代中期末～後期・古墳時代・平安時代後半期～鎌倉時代といった各時代にわたって人々の生活の営まれた遺跡であり、考古学では、このような遺跡を複合遺跡と呼びます。遺跡の広さは約四万平方メートルにわたりますが、各時代により少しづつその分布に違いがあり、弥生時代には比較的低い面に住居が築かれています。

この郷中遺跡の北東側（国道をはさんだ反対側）には雨谷遺跡（あまや）が存在し、弥生時代から古墳時代にわたる遺物の出土が知られています。昨年（1987）の11月に行われた試掘調査では、この両遺跡の間に存在する埋没谷に面した地表下約1.5mの地点で、古墳時代のものと推定される水田面も確認されています。

郷中遺跡は、豊川の形成する沖積地の自然堤防上に築かれた遺跡であるわけですが、遺跡は意外と浅い場所に眠っていました。

弥生時代の生活面も現在の水田面とあまり標高に違いはなく、水田耕作土を取り除くと、すぐに住居跡等が姿を現しました。このため、弥生時代の遺構も平安・鎌倉時代の遺構も同じ面で確認され、発掘現場を少し見ただけでは、一つの時代に非常に多くの遺構があったような錯覚をおこします。しかし、実際には、ある一時期に存在する遺構はあまり多くなく、この発掘調査現場で見る風景は、縄文晩期以降約2,500年にわたる人々の営みの累積の結果なのです。

今回の発掘調査は、昨年暮12月21日から開始され、現在C地区とD地区を調査中です。下図のA地区・B地区は既に調査が終了し埋められています。今後E地区の調査も行い、3月中旬にはすべての調査が終了する予定でいます。

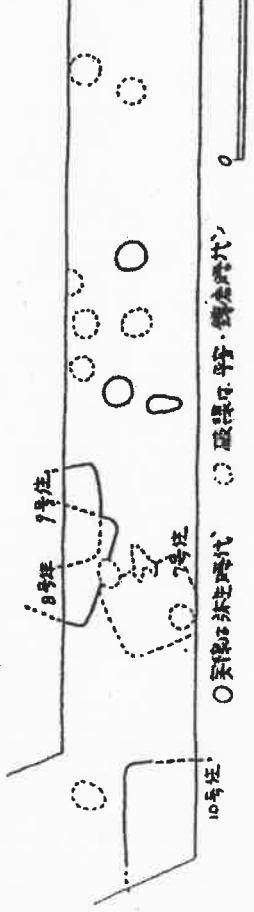


郷中遺跡周辺

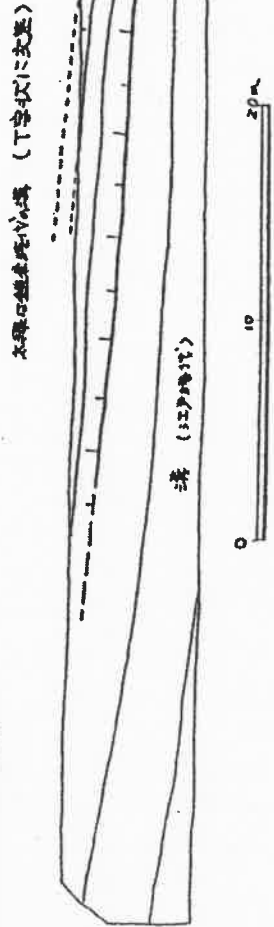
◎《C地区の遺構》

C地区では弥生時代と平安時代を中心とする遺構が確認されました。弥生時代の遺構としては、弥生時代後期を主とする住居跡5軒、土壇7基、溝1基が検出され、長方形の平面形をなすものと推定されます。試掘調査時、隅丸の2軒、B地区の4軒が含まれます。郷中遺跡では現在までに弥生時代の住居跡は11軒調査されています。住居跡1軒、土壇6基以上が検出されました。平安時代の遺構としては、住居跡ですが、弥生時代の住居と違って中央に炉(かまど)はなく、住居跡の北壁にカマドがつくられています。

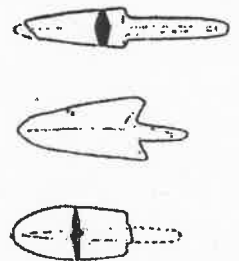
◎《C地区の遺構》



◎《D地区の遺構》



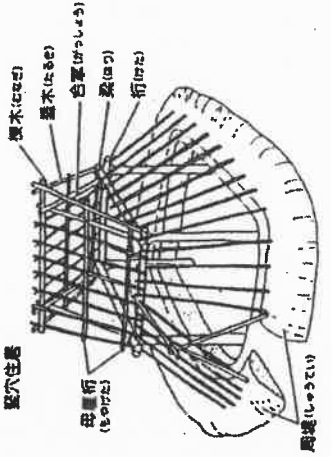
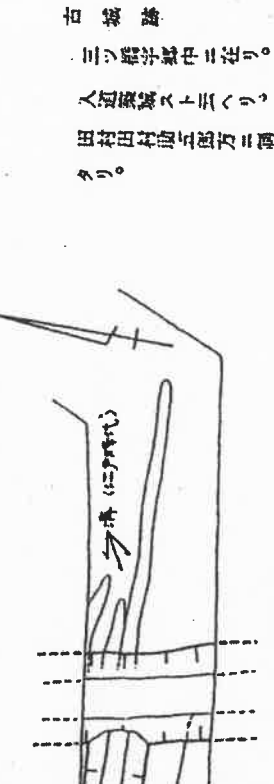
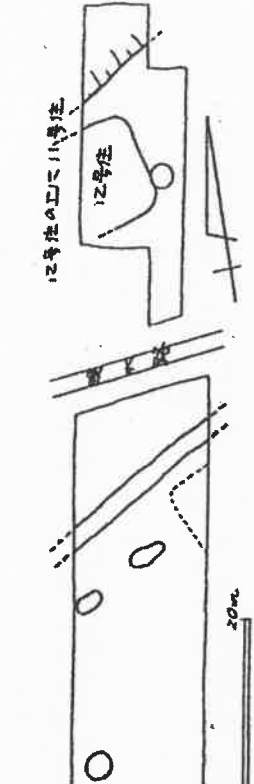
銅 鏃



弥生時代の矢じり (B地区・D地区出土)

◎《D地区の遺構》

D地区は現在調査中で、弥生時代の遺構はまだ掘り下げられていない箇所もあり、弥生時代の遺構は中央から鎌倉時代の土器を出土して、調査を行って、堀(ほり)の跡が検出された。堀の埋り方から、堀の存在した可能性も私たちが驚かせる。堀の埋り方から、堀の存在した可能性も想定されます。文献によれば、この郷中に、かつて三浦村古城(みやまのしろ)が存在したと伝えられており、時代が一致することから、この城跡(このしろ)に近いもの)との関連が注目されます。



「三河国全銀」より抜粋

古城跡

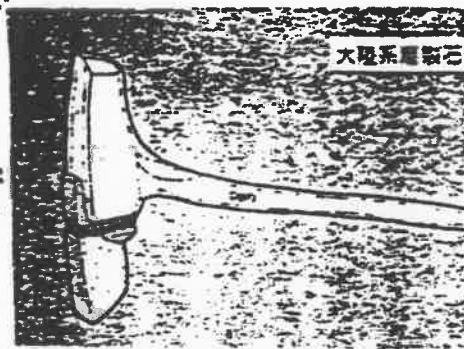
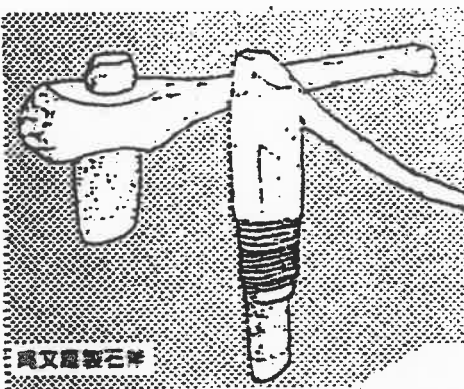
三ツ尾字郷中三在り。現今知トナル。鎌倉時代版図幅入道築城スト三ケリ。後醍醐野助五郎之三居ス。領地二畝田村田村助五郎方三浦札額シト、三河國二葉松三見エケリ。

〈縄文・弥生時代〉

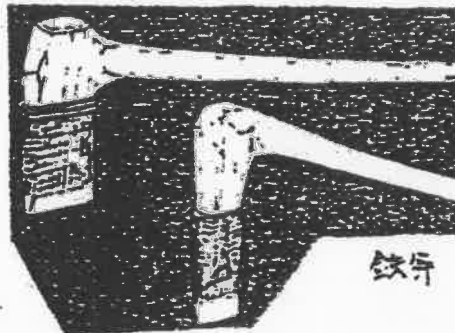
今回の調査では、壺・甕
高坏を主とする大量の弥生
土器が出土しましたが、こ
の他にも当時の生活を知る
多くの遺物が出土していま
す。縄文時代の石鏃・打製
石斧・磨製石斧や弥生時代
の挟入柱状片刃石斧・鉄斧
銅鏃・磨製石鏃などです。

なかでも注目されるのは
弥生時代の金属器であり、
現在までに銅鏃（銅製の矢
じり）5点と鉄斧1点が出
土しています。金属器は腐
蝕し易いため発掘調査でも
出土することは稀であり、
貴重な発見といえます。

この他にも、弥生時代の遺物として
管玉（首飾りなどに使用）の破片や、
土製紡錘車なども出土しています。身
に玉を飾り、金属製品を利用する当時
の人々の姿を想像してみてください。



挟入柱状片の石斧

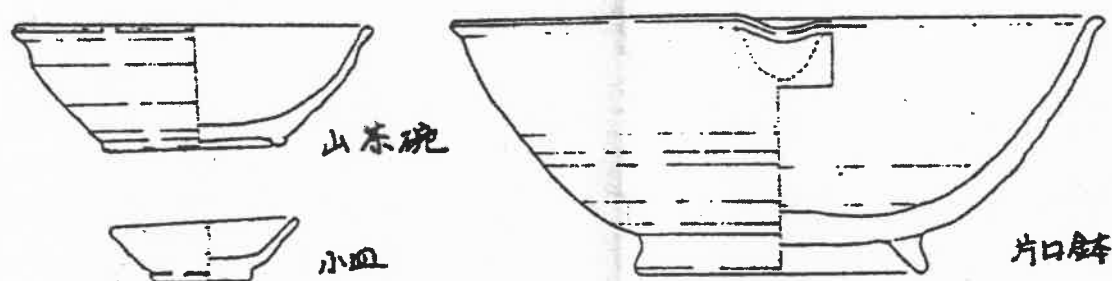


磨製石鏃



〈鎌倉時代の遺物〉

D地区の鎌倉時代の堀には、^{やまぢわん}山茶碗や^{こざら}小皿を主とする大量の遺物が投げ込まれていました。特に東西溝では、完形品の出土が多く、一部には5枚重ねて棄てられているものもありました。何らかの原因で、使用可能なものも含めて一度に棄てたものと想定されます。他にも、鉢・壺・甕の破片が若干出土していますが、おもしろいのは、^{なべ}鍋・^{かま}釜の類がほとんど出土していない事実です。



この他にも、古墳時代の^{すえき}須恵器や^{はじき}土師器、平安時代の^{かいゆうとうぎ}灰釉陶器や土師器、江戸時代の陶器や古銭（寛永通宝）なども出土しています。このように今回の調査ではバラエティーにとんだ様々な遺物の出土がみられました。

Ⅲ. ま と め

今回の調査は、県営ほ場整備事業（土地改良）に伴うものであり、工事によって影響を受ける水路や道路部分の調査を行ったわけですが、遺跡全域の十分の一にもみたくないわずかな面積の調査を行っただけで、このような成果を得ることができました。調査の終了する来月中旬までには、また新しい発見があるかもしれません。